25ansレギュラー執筆陣による★創刊35周年記念エッセイ

あの頃、そしてこれから vol.03

33年前、あなたは何をしてましたか？——今月の特別エッセイは、刺激的なキャッチコピーと共に
話題作『33年後のなんとなく、クリスタル』を上梓した田中康夫さん。
それぞれの道を生きる女性たちの姿は、私たちのこれからを考えるときにも大きな励みとなります。

Illustration : MICHIYO SHIRAHAMA

阪神・淡路大震災から20年——改めて「微力だけど無力じゃない」と心に刻む

文 田中康夫

PROFILE●たなか・やすお●1956年、東京生まれ。作家。小学校2年から高校卒業まで長野県で過ごす。一橋大学在学中に執筆した小説『なんとなく、クリスタル』が'80年文藝賞受賞。2000～'06年長野県知事、'07～'12年参議院議員、衆議院議員を務める。'14年11月に小説『33年後のなんとなく、クリスタル』（河出書房新社）を出版。
http://www.nippon-dream.com/

ちょうど20年前、50ccバイクにまたがって半年余り、阪神・淡路大震災の被災地を駆け巡っていた僕の活動がメディアで紹介されると、幾人もの見知らぬ搭乗客に羽田や伊丹の空港で声を掛けられました。「君を見直したよ」と。

ちょっぴりこそばゆい気持ちの一方、心の中で呟いたものです。もしもヘリコプターをチャーターして医薬品を運んだら、どう思われたのかな。「ふ～ん、クリスタル野郎がヴォランティアかい」と冷笑されたかなと。

六甲颪（おろし）の寒風が吹き荒ぶ中、家族を亡くし自宅を失っても前を向いて歩み出そうとしている人々に、僕がしてあげられることは何だろう？欧米系化粧品会社で働いていた広報担当者に掛け合います。避難所やテント村の女性たちに手渡す口紅と化粧水を提供して欲しいと。「肌がパサパサでねぇ。私だって女ですもの、化粧水くらい叩きたいわ。でも、そんな贅沢、言ってられないね」。一人のオバチャンの言葉に触発されたのでした。

数多くの顧客が暮らす阪神間の大惨事は、決して他人事ではない。義捐金だけでなく、具体的な貢献をしたいけれど、果たしてそれは何だろう……。思い悩んでいた広報の彼女たちと僕を結び付けてくれたのは、長年連載していた『25ans』編集部の担当者でした。昼間はヴォランティア。夜中に原稿を書くため長逗留していた大阪のホテルに、何十箱もの段ボールが届きます。

嬉しいわぁ、と受け取った女性の大半は、それ以前も、それ以降も実は、

単行本に収録された連載

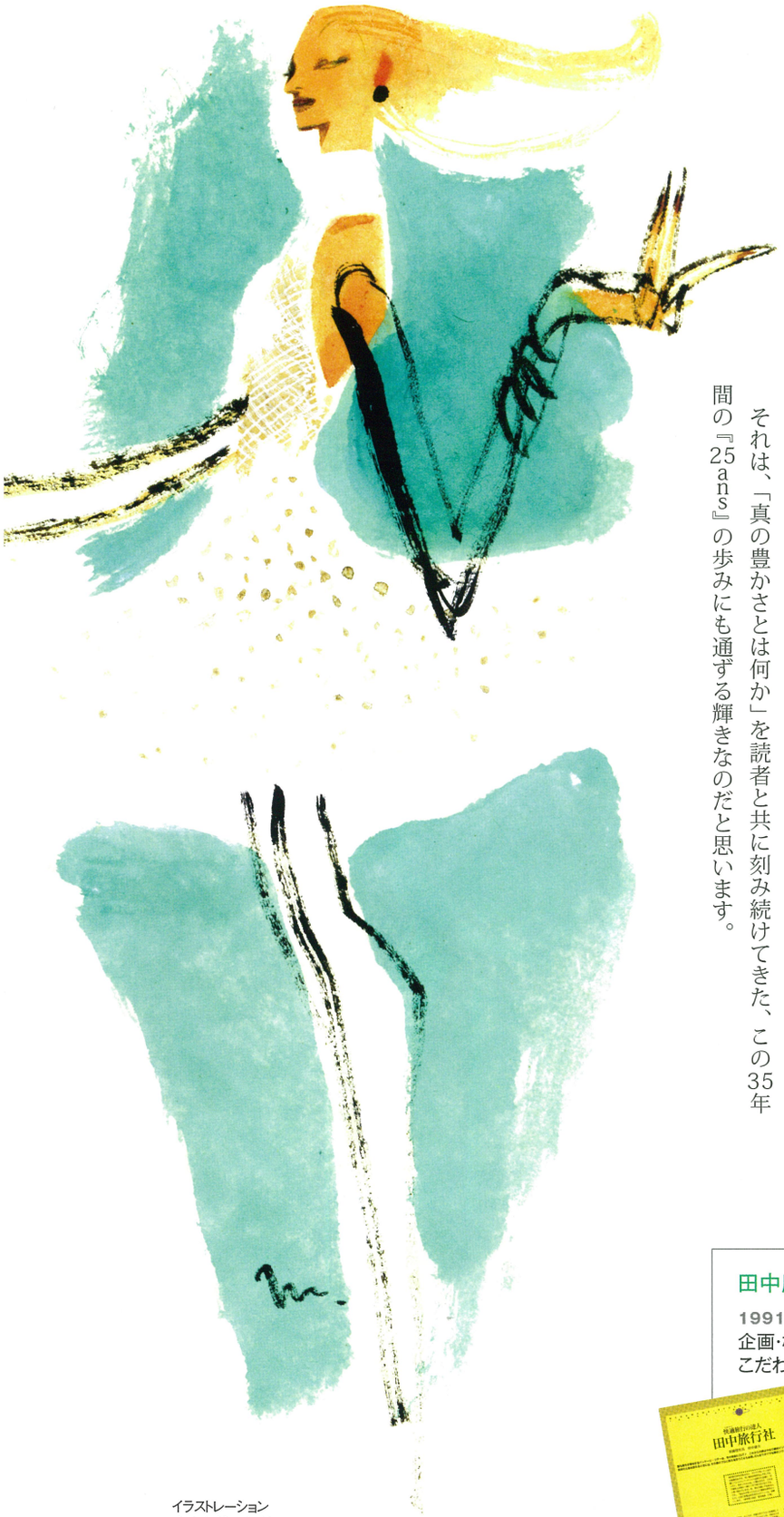
1985年4月号
短編集『昔みたい』のもとになった読み切り連載小説「う・た・か・た」

この号から始まった全21回の「う・た・か・た」。"芦屋市 平田町""千代田区 三番町""パリ ホテル・ル・ブリストル""名古屋市 八事"など舞台となる空間をテーマに設定。20代後半から30代前半にかけての女性たちの物語です。恋愛経験を重ねたからこそ「ただ一人の相手だけを愛し続けることが出来るならば、どんなにか素晴らしいだろう」という思いが響く'80年代の傑作集。『昔みたい』（新潮文庫）15編中14編がこの連載から収録されました。

社会が大きく動いたあの頃の表紙

1995年6月号
足掛け3年にわたる連載「都会のレシピ」スタート

白襟などに象徴されるコンサバティブな令嬢スタイル全盛期。「都会（きょう）のレシピ」は、30回におよんだ長期連載でした。"お洒落は社会的な営みである""戦後五〇年""知性、勤性、温性"から"パパラッチ現象""ミラノコレクション"まで、社会現象とその背景に鋭く切り込む人気連載に。1月17日の阪神・淡路大震災についても"心のチップ、それが、ボランティア"として掲載。地下鉄サリン事件、ウィンドウズ95発売…という平成7年でした。



手に触れたことすらない銘柄だったかも知れません。でも、当時三十八歳だった僕も、編集者も、広報担当者も、信じていたのです。たった一本の口紅や化粧水でも、ささやかだけど確かな勇気と希望を与えられるのだと。

ヴォランティアなのにホテル住まいですか、と顔をしかめた評論家もいました。地味な格好でシュラフにくるまって、避難所の片隅で寝泊まりしてこそヴォランティア。きっと、そう思い込んでいたのでしょう。逆に僕は、そうした旧来型の発想に違和感を抱きました。

自宅も家族も幸いに無事だった女性が、阪神間の浜っ側（はまっかわ）で被害に遭った学生時代の友だちの実家にお手伝いに出掛け、夕方には再び、海を見下ろす山っ側（やまっかわ）の部屋へと戻ったなら、それはヴォランティアらしくないのでしょうか？　いいえ、そんなことはありません。

「出来ることを、出来るときに、出来るところで、一人ひとりが出来る限り」。私たち一人ひとりの、内面の「あり方」こそが大切なのです。

「いまクリ」とロバート キャンベルさんが名付けて下さった、昨年末に上梓した『33年後のなんとなく、クリスタル』の中で再会する『なんとなく、クリスタル』（「もとクリ」）の登場人物たち。「微力だけど無力じゃない」と信じて、現在（いま）を〝生きていく私〟です。

それは、「真の豊かさとは何か」を読者と共に刻み続けてきた、この35年間の『25ans』の歩みにも通ずる輝きなのだと思います。

イラストレーション
白浜美千代
Michiyo Shirahama

PROFILE●しらはま・みちよ●イラストレーター。大阪生まれ。25ansでは、1985年より活動。'89年よりニューヨークのFITで学ぶ。2003年、講談社出版文化賞さしえ賞受賞。書籍カバーや広告、小説挿絵なども幅広く手がける。

田中康夫さんの思い出深い連載

1991年1月号
企画・構成・ビジュアル…ディテールまでこだわって、最先端の“旅”を提案

1年間の連載「快適（ワガママ）旅行の達人――田中旅行社」。読者のリクエストに応える形で田中さんが旅のプランを組み立てます。航空会社、滞在先から見どころや歴史的・文化的背景を解説。写真も自ら手配し、知られざる大人の楽しみ方のアイディアが満載。例えば“南アフリカ2週間＆ミラノでお買い物”“優雅な怠惰をむさぼるバーデン・バーデン＆パリ”“人生を謳歌する南イタリア享楽主義旅行”。時代を先取りしたオーダーメイドの旅を提案しました。